MARS(Modern Architectural Research)グループによる 1938年 New Architecture 展覧会を通して見られる イギリス近代建築運動の特質について

イギリス近代建築運動における MARS グループの活動に関する研究
1933年から1957年までを中心に その1

THE CHARACTERISTICS OF THE ENGLISH MODERN MOVEMENT IN ARCHITECTURE THROUGH THE NEW ARCHITECTURE EXHIBITION IN 1938 BY THE MARS (MODERN ARCHITECTURAL RESEARCH) GROUP

A study on the activities of the MARS Group in English modern movement
in architecture from 1933 to 1957 Part 1

渡辺研司*

Kenji WATANABE

This research is a part of study on the characteristics of the modern movement in English Architecture through the activities of the MARS (Modern Architectural Research) Group in the English modern movement in architecture from its forming in 1933 to the disbanding in 1957. It shall be focused on the genesis and activities of the MARS Group in the 1930's and the process and internal and external influences of the MARS Exhibition called New Architecture in 1938. Methodologically, the study must be emphasized to discover and analyse the historical facts from the primary sources. Therefore, the aims of the study is, simultaneously to find and arrange the MARS as well as CIAM documents as a historiography of English modern movement in architecture.

Key Words: MARS Group, English Modern Movement in Architecture, MARS Exhibition, CIAM
マースグループ、イギリス近代建築運動 マース展覧会、シーム

1. 序：研究の目的と方法

本論文は、近代建築国際会議組織（以下CIAM）のイギリス支部である近代建築研究グループ（以下MARSグループ）を近代建築史の枠組みの中に位置づける研究の一部をなすものである。

MARSグループの存在は、一般にはCIAMのイギリス支部として、近代建築史上において知られているだけであり、その具体的な活動に関しては、洋の東西を問わず、十分な考察がなされていない。また、わずかに存在する研究も、そのほとんどが既存の近代建築史・建築論、いわゆる二次史料の記述に基づいたものである¹⁾。MARSグループに関する一次史料を詳細に、なおかつ総括的に分析した研究では、オックスフォード・ブルックス(Oxford Brooks)大学のジョン・ゴールド(John R. Gold)教授によるものがある²⁾。

本研究は、歴史研究の基本的態度である実証性を重視し、二次史料に基づく研究、つまりは既存の近代建築史学にみられる著名建築史家による建築史観を通してではなく、今までその存在が目立たなかった、ロンドンの王立英国建築家協会(以下RIBA)附属図書館と建築協会学校(以下AAスクール)附属図書館所有の、MARSグループのメンバーであった建築家による書簡、会議議事録を中心とした一次史料の読解に基づき考察を行う³⁾。

本研究の全体構成を概観すると、次の二点が研究の主題となる。第一点では、第二次大戦前後を通してイギリス近代建築運動におけ

るMARSグループの活動の役割と評価そしてその位置づけを行いながら、今までのイギリス近代建築史研究において十分に行われていない、MARSグループの活動とヨーロッパ諸国、アメリカとの関係を通してイギリス近代建築運動の特質を解明する。第二点では、CIAMの既往研究並びに史料編集において未だ行われていない、MARSグループが主として関わった1947年のCIAM第6回会議に関する史料編集を試みる。

本論文は第二次大戦前のMARSグループの活動において、その運動の一つの主題をなし、1938年に開催された新建築(New Architecture)展覧会に着目する。未だ展覧会自体の存在も一般に知られていないため、展覧会の内容について概説を行いながら、ゴールド氏の研究を含めた既往研究の考察では不足していると思われる、展覧会開催の経緯と開催後に見られるイギリス国内、ヨーロッパ、そして日本を含めた諸外国の反響について分析し、1930年代のイギリス近代建築運動において、展覧会がもつ意味と運動の特質について考察を行う。

2. MARS グループの結成の経緯とその問題点

MARSグループの結成が公式に発表されたのは、1933年4月26日号の「MODERN ARCHITECTURAL RESEARCH」と題した、『アーキテクツ・ジャーナル』（以下AJ）誌上においてである⁴⁾。

* AA スクール大学院 歴史理論博士課程・工修
AA グラジュエイトディプロマ

Architectural Association Graduate School History and Theory Ph.D. Course,
M. Eng. AA GrDip

結成の際に会長 (Chairman)として選出された東京生まれのカナダ人建築家ウェルズ・コーツ (Wells Coates, 1895-1958) を中心に、10人の建築家と2人の建築ジャーナリストによってメンバーは構成されていた。しかし、1933年にグループが突如結成されたわけではない。1928年第一回CIAM会議において、参加メンバーにイギリス人建築家の名前が見あたらないように⁵⁾、その会議の直後からCIAMの事務局長 (Secretary)であったジークフリート・ギーディオンによって、イギリスにおけるCIAMグループの設立を促す動きが、イギリス人建築家ハワード・ロバートソン(Howard Robertson, 1888-1963)との往復書簡の形で存在した⁶⁾。書簡のやりとりだけでなく、実際に第二回、第三回CIAM会議にロバートソンは参観者として出席している⁷⁾。しかしロバートソンが表現主義的近代建築を評価したため、しだいにギーディオンとロバートソンとの近代建築に対する思考の相違が深まり、1930年からは、ギーディオンは、交渉の対象をロバートソンから、建築ジャーナリストであったピーター・モートン・シャンド(Peter Morton Shand, 1888-1960)に変えている。

ギーディオンの要請を受けたシャンドは、当時、芸術と科学の総合を目指してロンドンを中心として活動していた新興芸術家集団、20世紀グループ(Twentieth Century Group)を通して、そのメンバーであったコーツとイギリス人建築家のマクスウェル・フライ(Maxwell Fry, 1899-1987)にCIAMのイギリス支部設立を打診している⁸⁾。最初のMARSグループの集まりは、公式発表の2カ月前、1933年2月28日、ロンドンのサザーランド・テラス26番地で、コーツ、フライ、デイヴィット・プレデルブーベリー(David Pleydell-Bouverie不詳)、ヒューバート・ヘイスティングズ(Hubert C. De Hastings, 1902-86)、シャンド、ジョン・グログ(John Gloag不詳)の6人が参加して行われた。その際、グループの名称を、Modern Architectural Researchの単語の頭文字から造ったMARSグループにすることが、コーツによって提案された⁹⁾。

その集まりにおいて、1929年に発表されたCIAM規約の4つの点、①現代における建築の問題を明確にすること、②近代建築の理念を再主張すること、③技術的、経済的、社会的組織を通してこの理念を形成すること、④建築のもつ現代的問題の解決にむけて行動すること¹⁰⁾が参加メンバーによって再確認された。

このグループへのメンバーの選定には、CIAMから強い圧力がかかっている。それはグループ成立以前にギーディオンに要請を受けていたロバートソンのように、CIAMの主張するいわゆるインターナショナル・スタイルをもった近代建築に賛同しないものは除外されていることからわかる。他の例でいえば、当時煉瓦を使った様式建築をつくるジャイルズ・ギルバート・スコット (Giles Gilbert Scott, 1880-1960) やチャールズ・ホールデン (Charles Holden, 1875-1960) のような建築家は、たとえ大作があろうとも結成の際に声はかけられていない。逆にヘンリー・ラッセル・ヒッチコックとフィリップ・ジョンソンによる近代建築：国際展覧会(Modern Architecture: International Exhibition)にイギリスの例として取り上げられたジョゼフ・エンバートン(Joseph Emberton, 1889-1956)は、再度の勧誘にもかかわらず、メンバーにはならなかった¹¹⁾。

グループのメンバーになる上での条件には、上記のCIAM規約に同意し、既存メンバー2人の推薦を必要としたのであるが、最終的にメンバーになるかどうかは、あくまで本人の意志にゆだねられていた¹²⁾。エンバートンと同様に当時構造技術者として評価の高い建築

を設計していた、オーエン・ウィリアムズ(Owen Williams, 1890-1969)も運動としての近代建築に興味を示さず、勧誘はあったが、メンバーにはならなかった。また、メンバーに一旦なったとしてもMARSグループの意図する近代建築とは異なるものを計画し、建設したものは退会処分となった。その顕著な例が、初期メンバーであったコーネル・ワード・ルーカス事務所(Cornell Ward & Lucas)の場合に見られる。彼らは、1936年に行われたニューポート(New Port)の市民センターの設計競技において、新古典主義様式の強い作品を提出し、グループ内から批判を受けた事件で、この問題と第二次大戦勃発きっかけにアミヤス・コーネル(Amyas Connell, 1901-80)とバシル・ワード(Basil Ward, 1902-76)はイギリスを離れ、コーリン・ルーカス(Colin Lucas, 1906-88)だけがMARSのメンバーとしてイギリスに残る¹³⁾。

グループ内での近代建築に対する考え方の相違による入退会の動きは注目する必要がある。なぜなら、インターナショナル・スタイルの近代建築が、イギリスに流入する際に起こる問題の存在を映し出していると考えからである。つまり、インターナショナル・スタイルのイギリスへの流布が、その反動として、19世紀来続く、煉瓦を使った様式への回帰に見られる、イギリス的伝統への模索という動きをさらに高めた、一つの大きな要因となったことを示唆している¹⁴⁾。

この問題は、1930年代において、MARSグループの活動がCIAMつまりヨーロッパ大陸における近代建築の単なる受け売りではなく、自らの近代建築の定義、理念の構築の必要性を問うという課題を、グループ自体がその成立と同時に請け負わなければならなかった、という事実を示している。その課題に対してとりえずヨーロッパ大陸の近代建築に従うのか、あるいはイギリス的伝統を新たに作りまたそれを維持していくのか、という二つの流れが存在していると仮定できる。

次に考察を行うのは、このMARSグループが背負った課題が、第二次大戦前において、グループの最も大きな活動であった1938年の新建築展にいかにか投射され、またどのように発展したかという点である。

3. 新建築展覧会開催の経緯

最初に1930年代におけるMARSグループの活動について概説を行う(表1)。MARSグループの活動内容は大きく二つに分けることができる。第一点は、いわゆるインターナショナル・スタイルに見られるヨーロッパ大陸の近代建築のイギリスにおける普及と促進であり、それに対しては展覧会という形式が採用された。第二点は、CIAMとの議論を通じて、都市計画的視点から建築的提案を行うということであった。その対象は、不良住居地区再計画、都市計画法、住宅政策、さらにはロンドンの都市計画等が取り上げられた¹⁵⁾。本論文ではこの第一点に含まれる展覧会という活動に注目し検討する。

展覧会の最初の提案があったのは、MARSグループとして初の代表を送った、1933年8月のCIAM第4回会議の後、8月29日のグループ内での会議においてであった¹⁶⁾。CIAM設立に際して『ラ・サラ宣言』(La Sarraz Declaration)として掲げられた目標のなかに「近代建築と世論」という項目があり¹⁷⁾、MARSグループとしてはその指示を忠実に守ったわけであるが、1920年代後半までは、ほとんどヨーロッパ大陸の近代建築運動とは孤立無縁であったイギリスだけに、

この項目が主要なテーマとしてグループ内において認識されたものと推測する。そのグループ内での会議において、グループの活動の方針として二つのことが、宣言 (propaganda)として発表されている。
宣言：

- ① 建築雑誌、評論、パンフレット、書簡、展覧会による、近代建築のための宣伝活動
- ② 地方行政機関、都市計画委員会、助言団体の反動的態度に対する新たな建築法規制等の宣伝及び提案活動¹⁸⁾

この二つの宣言は、前述したMARSグループの戦前における二つの活動と重なっている。最初に参加が提案され、1934年9月、ロンドンの見本市会場であるオリンピア(Olympia)で開かれた住宅展覧会においては、近代建築の宣伝活動というより、活動の第二点である既存の都市計画法等に対する提案という色合いが強かった。それは、ロンドンの不良住宅地区であったベスナル・グリーン(Bethnal Green)の社会学的調査研究というものであった。

この展覧会の後、1935年2月の中央執行委員会において、近代建築の啓蒙の一環として規模の大きな展覧会の企画が提案され、メンバーから、ハーゼン・シーズ(Hazen Sise不詳)、レイモンド・マグラース(Raymond McGrath, 1903-77)、リンゼイ・ドレイク(Lindsay Drake, 1909-80)が展覧会専門委員として選ばれている¹⁹⁾。

〈表1〉MARSグループ(CIAM) 活動年表 1933(1928)-1939

活動内容(月日)：会議M 総会GM 定例会議AGM 中央執行委員会CEC 執行委員会EC 専門委員会SCC 展覧会委員会EXC 都市計画委員会TPC CIAM 会議CIAMno. CIRPAC会議CIRPAC 開演会MARS LE、司会者(中心人物)：参加者数：場所：()内は会議における重要事項 特記なき限り会議の場所はロンドン 司会者、参加数の表示がないのは不明のため	
1928	CIAM1 (6.26-29) ラ・サラ、
1929	CIAM2 (10.24-26)ロバートソン1 フランクフルト(最小居住居)
1930	CIAM3 (11.27-29)ロバートソン1ブリュッセル(機能都市)
1933	M(2.26)コース7 (MARS設立会議)、CIRPAC(4.21-22)パリ、M(5.8)コース4、CIAM4(7.29-8.13)コース4パリアテネ(アテネ憲章)、M(9.5)コース11(CIAM4報告) M(9.19)ゴッドスミス、M(10.11)コース7、SCC(11.8)フライ、MARSLE(11.14)ノイラース(住宅都市計画における統計表現について)
1934	SCC(1.17)コース7、SCC(1.23)コース3(ベスナルグリーン地区計画)、SCC(2.8)コース5、M(2.14)コース7(材料、構造システム)、SCC(2.20)11、M(3.11)コース11(スラムクリアランス) GM(3.14)(新しい住宅層への招待)、CIRPAC(5.9-21)コース9ロンドン(CIAM5会議のテーマ)、M(5.30)、GM(6.8)フライ18(オリンピアでの展覧会内容の提示) M(6.11.13)フライ(オリンピア展覧会)、GM(6.27)リチャーズ13、GM(6.30)13、GM(7.13)、オリンピア展覧会MARS参加(9.12-26)オリンピア(ベスナルグリーン地区計画) GM(12.5)ヘイスティングス24(グループ規則草案)、CEC(12.17)CIAMとの関係)
1935	CEC(1.7)コース7(規則草案)、CEC(1.14)フライ、CEC(1.21)サミュエル5、CEC(1.28)アラップ6、CEC(2.4)コース7、CEC+GM(2.6)ヘイスティングス28(MARS1935年度活動プログラム) CEC(2.19)サミュエル、CEC(2.25)5、CEC(3.4)アラップ、GM(3.6)ペイヤー(リュベトキンによる専門委員会、近代建築展覧会) CEC(3.18)コース6(サミュエルによるATOについての報告) CEC(4.8)ワード4、GM(4.17)ヘイスティングス20、CEC(4.29)アラップ、CEC(5.13)コース7、GM(5.15)ヘイスティングス11、CIRPAC(6.8-13)コース2アムステルダム、CEC(6.17)4(展覧会委員会からの報告) GM(7.19)リチャーズ23、CEC(8.12)サミュエル5(アムステルダムCIRPAC会議報告)、CEC(9.10)4、M(9.11)ワード、CEC(10.14)、M(11.11)、CEC(11.29)5(近代建築展覧会の提案)、CEC(12.16)7、CEC(12.18)、CEC(12.30)。
1936	AGM+CEC(1.28)ショルベルグ26(CIRPAC会議参加、MARS展覧会) CEC(2.5)6(MARSとATO共同提案) CEC(2.13)7、CEC(2.24)リチャーズ7、M(3.1)2(サミュエル、デンビー展覧会共同提案) CEC(3.5)7(展覧会委員会の報告、MARS規約のCIAMへの送付)、CEC(3.18)6、CEC(3.25)(MARS展) CEC(4.7)(MARS展プログラム草案)、GM(7.1)リチャーズ21(外国建築家団体との関係) EC(7.27)リチャーズ6、EC(8.20)サミュエル4(LCC建築規制)、EC(8.31)12(MARS展)、EC(9.7)2(CIRPAC会議への準備)、CIRPAC(9.9-12)フライ、タットンブラウン5・ラ・サラ(CIAM5のテーマ) EC(9.18)リチャーズ7(MARS展、CIRPAC会議の報告) EC(9.18)リチャーズ7、EC(9.24)7(展覧会の大衆性)、M(10.5)リチャーズ12、EC(10.12)リチャーズ4(RIBAコンペシステム)、M(10.21)モホリ・ナギ+サミュエル(MARS展)、EC(10.26)5、EC(11.9)リチャーズ5(MARS展)、EC(11.23)5(MARS展)、EC(12.7)リチャーズ6(MARS展) M(12.17)、EC(12.22)リチャーズ6(ニューポートコンペ)
1937	EC(1.4)3(ニューポートコンペ)、EC(1.15)3、EC(1.25)ECリチャーズ7(ニューポートコンペ、MARS展)、AGM(2.4)リチャーズ29(CIAMへのMARSの貢献、MARS展)、EC(2.16)リチャーズ8(ニューポートコンペ)、EC(3.6)5(ニューポートコンペ、MARS展)、EC+CEC(3.31)リチャーズ5、EC(4.2)4、CEC(4.6)タットンブラウン5、GM(4.20)18(ブラッドショウ展覧会企画委員長の任命)、EXC(4.22)8(ショウのカタログ書き)、EXC(5.4)リチャーズ5(展覧会の延期、ダミカカログ作成)、EC(6.2)サミュエル4(CIAM5会議)、GM(6.10)サミュエル7、EC(6.16)リチャーズ7(MARS展、CIAM5会議)、CIAM5(6.28-7.2)コース7、フライ、シャンド3パリ(居住環境と余暇) EXC(7.8)6(MARS展)、M(7.21)、EXC(7.28)リチャーズ6、EXC(9.16)5、M(9.23)サミュエル10(MARS展) M+EXC(10.4)シェマイエフ12(MARS展)、M(10.11)コース13(MARS展)、M(10.12)4、M(10.18)コース11(1938理想住宅展の草案)、EXC+M(10.25)コース8(MARS展名称) EXC(11.1)フライ8(MARS展名称)、EXC(11.8)9、EC(11.16)リチャーズ8(展覧会名称、雑誌発表、講演企画、オープニング)、EXC(11.22)14EC(11.25)、EXC(11.30)リチャーズ10(名称決定、雑誌発表)、EXC(12.8)フライ+サミュエル10(CIAMメンバーの参加)、EXC(12.13)シェマイエフ15、EXC(12.20)5EXC(12.30)コース7(MARS展プレス発表)
1938	EXC(1.3)シェマイエフ10(コルビジエへの招待状)、EXC(1.6)コース13(展覧会テレビ発表)、MARS展覧会(1.11-29)ニューバーリントン・ギャラリー、EXC(1.14)リチャーズ8、EXC(1.17)(展覧会に関するディスカッション) EXC(1.18)7、EXC(1.26)9、AGM(2.23)リチャーズ41(展覧会報告、CIAM会議報告、次回CIAM会議のイングランド開催の可能性)、EXC(3.3)3、EXC(3.14)5、EXC(3.21)サミュエル6、TPC(3.30)(都市計画委員会、ロンドン都市計画)、EXC(4.6)3、EXC(4.13)フライ3(フィルム展覧会)、TPC(5.5)(都市計画委員会、1942ロンドンCIAM会議)、TPC(5.17)6、TPC(6.14)(長期活動計画)、EXC(6.20)4(オリンピア建築展覧会の企画、MARS建築コンペ委員会設立)、CIRPAC(7.10)フライ、タットンブラウン2ブリュッセル(CIAM5会議の準備) 建築展覧会MARS参加(9.16-10.1)オリンピア、EC(10.10)サミュエル10(ライイトと晩餐計画)、GM(10.25)
1939	EC(1.9)フライ(コンペシステムCIAM)、AGM(3.8)(TCP報告、CIAM報告)、EC(3.13)(ライイトと晩餐計画)、GM(4.5)、TCP(7.5)、CIRPAC(7.8-10)フライ、タットンブラウン、リング3(CIAM6会議のテーマ、開催場所)、GM(9.7)(CIAM6)、GM(9.21)(活動予定プログラム、MARSロンドンプラン)

注：参加者数は、イギリス人またはMARSグループのメンバーの数を示す。

この年表は、RIBA付属図書館、AAスクール付属図書館にある個人建築家及びMARSアーカイブをもとに筆者が作成した。

ローマ時代のヴィトルヴィウスの理論からの借用である²⁴⁾。CIAMにおいては言及されることのなかった歴史的な建築理論を近代建築にあてはめたといい、革新的思想をもったMARSグループの建築家たちでさえも、歴史的なものに依拠するある種の保守性をもっていったというイギリスの近代建築運動のひとつの特徴を示している。

また1936年春から展覧会の企画メンバーの選定とスケジュールが、サミュエルを中心にして議論され、展覧会の概要が次第にはっきりしてくる。展覧会の配置計画は、当時ワルター・グロピウスとともにパウハウスからイギリスに亡命してきていた、ラスロ・モホリ＝ナジ(Laszlo Moholy-Nagy)が担当し、途中でミーシャ・ブラック(Misha Black, 1910-77)が交代した。カタログ制作、宣伝等はアーキテクチュラル・レビュー(以下AR)誌のジェームズ・リチャーズ(J.M. Richards, 1907-92)とテクトン(Tecton)の所員であるウィリアム・タットンブラウン(William Tatton Brown, 1910-97)、建築史家のジョン・サマーソン(John Summerson, 1904-92)が、渉外と資金収集にはサミュエルとフライがそれぞれ担当した。展覧会の企画委員長としては、当時ロンドンのニュー・バーリントン・ギャラリー(New Burlington Gallery)のキュレーター、マイケル・ブラッドショー(Michel Bradshaw, 不詳)が任命された。なおこのギャラリーでは1936年にロンドンではじめてシュールレアリスムの展覧会が開催されている。

展覧会の準備において特に興味深いのは、サマーソンの果たした役割である。1936年の終わりから翌年春にかけて、展覧会の模擬カタログを作成し、そこには、近代建築とは何か? MARSグループとは何か? なぜ展覧会なのか? いつどこで? 何を展示するのか? 誰が支援するのか? ²⁵⁾ という6つの問いというかたちで展覧会の主旨が説明されている。サマーソンは、最初の近代建築とは何か? という問いに対して、イギリスにおける近代建築は、実験的な段階を終え、その先進性を示すだけの十分な例がある、という。この見解は、1937年MoMAで開かれたイギリスの近代建築展におけるカタログに載った、ヒッチコックによるイギリス近代建築への表現、「5年前近代美術館で開かれた近代建築の国際展覧会には、主にフランス、オランダ、ドイツそしてアメリカにおける建物が展示された。イギリスはほとんどないに等しかった。しかし今日、イギリスは、世界における近代建築の先進国といっても過言ではない。」²⁶⁾と一致している。また、この模擬カタログの作成は、資金調達のための重要な説明資料という意味があり、また正式のカタログでは見られない展覧会に対する主張が、率直に表現されている。

一方、カタログ委員会は、正式のカタログのはしがきの原稿を、サミュエルの父であり政治家のヒューバート・サミュエル(Hubert Samuel)を通じて、劇作家のバーナード・ショウに依頼する。グループのねらいとしては、当時左翼的自由主義者であり、知識階級を代表するショウにグループ自体の存在を認めてもらうことにあった。ショウの原稿はほとんど変更されないまま採用されている。ただし、一点だけMARSグループ内でその内容について議論があったのは、ショウの用いたMartian Architecture(火星人の建築)という表現の是非に関してであった。当時の一般のイギリス人の目には、MARSグループが主張する近代建築がまるで火星人の建築に写ったことを、ショウ独自のユーモアのセンスをもって表現したものであるが、逆にいうとそれほどMARSグループの主張する近代建築が、イギリスの人にとって目新しく奇妙であったのかを証明している。

4. MARS 新建築展覧会

1937年9月になって、正式の開催日程が、当初の予定から1年遅れて、1938年1月15日から3週間と決定された。会場は、予定通りロンドンのニュー・バーリントン・ギャラリーで行われることになった。11月には、展覧会の開会祝辞の人選に入っており、資金的な協力をしている数人の上院議員の名前があがった。また、コーツの提案で、当時人気SF作家であった、H.G.ウェルズにも声をかけているが、最終的には、ル・コルビュジェが行うことになった²⁷⁾。

展覧会の企画委員長のブラッドショーは、展覧会前に行われたほとんどのすべての企画会議に出席しており、現場とグループとの調整役を果たしたのであるが、一度だけ展覧会の名称を決定する際にMARSグループが押す案に異を唱えている。1937年、11月15日の会議で、MARSグループ執行委員会は、展覧会の名称をMARS EXHIBITION、副題として An Exhibition of the Elements of Modern Architecture organised by the Mars group、とすることを提案している。ところがブラッドショーは、MARS EXHIBITIONというタイトルはよくない、と否定し、もっと強い印象を与えるものを要求している。それを受けて、執行委員会は、A more realist Exhibition(より現実的な展覧会)、Sticks and Stones(棒切れと石ころ)、Towards a new architecture(新しい建築に向けて)など10案を提案している²⁸⁾。しかし最終的に合意されたタイトルは、New Architectureであり、副題を残す案であった。このタイトルは明らかにコルビュジェの『VERS UNE ARCHITECTURE』(建築をめざして)の英語版タイトル『Towards a New Architecture』から借用したものであった²⁹⁾。

展覧会の主旨は、前述したように、世界中の近代建築(計画のものを含めて)を写真と模型によってイギリスの一般大衆に示すことにあった。会場構成は、ウォットンの建築理論、利便さ、堅牢さ、喜びという概念に基づいて、近代建築の機能性、技術性、審美性に焦点を当て、大きく3つに区分された³⁰⁾。そして、子どもの空間とロンドンの都市計画について補足的に展示が行われた(図1)。展示写真は全部で134点、模型は14点を数えた。展示された近代建築は、イギリス中心にヨーロッパ11カ国、アメリカ合衆国、そしてアジアからは唯一日本のアントニー・レイモンドの夏の家が、写真によって紹介されている。

(図1) New Architecture 展示平面図

[出典Architectural Review p111 1938.2]

近代建築のリストを国別にすると、イギリス以外では27点と圧倒的にフランスが多く、そのなかでもル・コルビュジェによるものが写真11点、スイス・バビリオンの模型1点、計12点を数えている。しかも、ソビエト・パレス、アルジェの都市計画、輝ける都市など

の計画案5点が含まれていた。これは、イギリスで展示作品が最も多かったバーソルド・リュベトキン (Berthold Lubetkin 1901-1990)+テクトンの12点と並ぶ数である(表2)。見方を変えれば、この新建築展はイギリスでの最初のコルビュジェ展の様相をもつものであり、ル・コルビュジェ自身が開会の挨拶を行い、前述したように展覧会のタイトルが、彼の著作の一部から取られた理由を示している。

反響のところで考察するが、展覧会の一つの特徴として、イギリスにおける近代建築の展示例が、MARSグループのメンバーによるものだけでなく、前述したMARSグループとは関わりをもたなかった建築家、エンバートン、ウィリアムズ、ホールデンによる作品を含んでいた。また、設計者不詳の作品は、ほとんどが19世紀以前につくられたものであり、いわゆる近代建築の素形をなす歴史的な例として取り上げられた。つまり、この展覧会が、結果的には、必ずしもMARSグループが意図したCIAMの唱えるインターナショナル・スタイルの近代建築の総花的展示ではなく、煉瓦を使って表現され

(表2) New Architecture 展に展示された建築家名と作品数を示す表

国名	MARS	写真	模型	計	国名	MARS	写真	計	
建築家名	CIAM	実作	計画	実作	計画	建築家名	CIAM	実作	計画
イギリス					スイス				
Lubetkin+Tecton	○	10		2	12	E.Bosshard		1	1
Fry+Gropius	○	6		3	9	Egenter+Burckhardt		1	1
W.Coates	○	3	1		4	Hubacher+Steiger	○	1	1
Chermayeff	○					H.Leuzinger		1	1
+Mendelsohn		1		2	3	R.Maillart		1	1
E.Goldfinger	○	2			3	O.Senn		1	1
York+Breuer	○	1	1		3	A.+E.Roth+Breuer	○	1	1
J.Emberton		2			2	R.Steiger	○	1	1
C.Entwistle	○	1		1	2	設計者不詳		1	1
C.Pearson		2			2	小計		9	9
D.Pleydell-Bouverie	○	2			2	チェコスロバキア			
R.Tubbs	○	1		1	2	J.Fragner		1	1
O.Williams		2			2	B.Fuchs	○	2	2
Adams, Holden						J.Gocar		1	1
+Pearson		1			1	Havlicek+Honzik	○	1	1
M.J.H.+Bunney		1			1	Mies van der Rohe		1	1
D.Clarkhall	○	1			1	小計		6	6
Connell+Ward	○					スウェーデン			
+Lucas		1			1	Ekwall+Dah.		1	1
M.Crowley		1			1	S.Markelius		2	2
F.Gibberd	○	1			1	設計者不詳		2	2
P.J.B.Harland		1			1	小計		5	5
G.C.Kemp		1			1	オランダ			
C.Kirby	○	1			1	Brinkmann+Vlugt	○	3	3
W.Lescaze	○	1			1	J.J.P.Oud	○	1	1
R.McGrath	○	1			1	小計		4	4
C.Nicholson	○			1	1	フィンランド			
設計者不詳		8			8	A.Aalto	○	3	3
小計		52	2	9	3	66	小計	3	3
フランス					イタリア				
Le Corbusier	○					F.Albini		1	1
+Jaanneret		6	5	1	12	R.Fagnoni		1	1
Baudouin+Lods	○	2			2	Terragni+Lingeri		1	1
A.Lurcat	○	2			2	小計		3	3
P.Chateau		1			1	オーストリア			
M.Fournier		1			1	F.Singer	○	2	2
Maigrot+Freyssinet		1			1	小計		2	2
E.Goldfinger	○	1			1	ハンガリー			
M.Ridet		1			1	設計者不詳		1	1
O.Zollinger		1			1	小計		1	1
設計者不詳		5			5	USA			
小計		21	5	1	27	E.Born		1	1
ドイツ					ハンガリー				
A.Korn	○	2		1	3	R.H.Canfield		1	1
M.Breuer	○	1			1	A.Faidy		1	1
M.Elsaesser		1			1	R.Hood		1	1
W.Gropius	○	1			1	Howe+Lescaze	○	1	1
E.Mendelsohn		1			1	A.Kahn		1	1
Schuster						R.Neutra	○	3	3
+Fabry+Hirsch		1			1	TVA		1	1
H.Scharoun	○	1			1	小計		10	10
設計者不詳		2			2	日本			
小計		10		1	11	A.Raymond		1	1
合計		127	7	11	3	148	小計	1	1

注: Lubetkin+Tecton の建築家表記の内訳は、Lubetkin+Tecton3、Tecton5、Lubetkin2、Lubetkin+Drake+Tecton1、Harding+Tecton1となっている。Fry+Gropiusは、Fry+Gropius1で残りはすべてFryのみ表記。Corbusier+Jaanneretは、Corbusier3残りはすべてCorbusier+Jaanneretの表記となっている。この表は、New Architecture 展カタログ付属の作品リストをもとに筆者が作成した。

た新しい建築や歴史的建築等を含んだ展示となった。また前述したように過去の建築理論にその構成を依拠していることから、展覧会の主旨には、モダニズムの本意とする過去のものとの決別を徹底することはできず、メンバーによる作品の選定には、伝統の存在を重視するイギリス的保守性が、近代建築選定と同時に存在していたことを示している。

5. 新建築展覧会の反響と批判

次に展覧会後のイギリス国内、国外の建築雑誌にとりあげられた論評と、MARSグループ内外の建築家からの批評に注目する。そしてそこに見られる各国の近代建築に対する考え方を比較しながら、イギリス近代建築運動の国際的評価ならびにこのMARSグループ展覧会が、イギリス近代建築運動においてもつ意味を考察してみる。

今回取り上げる国内外の建築雑誌は、イギリスのAR誌、AJ誌、『RIBAジャーナル』(以下RIBAJ)、『AAジャーナル』(以下AAJ)の4誌、アメリカの、『アーキテクチュラル・フォーラム』(以下AF)、『アーキテクチュラル・レコード』(以下ARecord)の2誌、オランダの『De 8 en OP Bouw』,そして日本の『建築世界』に載った論評である³¹⁾。また建築家の批評としては、AR誌に掲載されたル・コルビュジェによるもの、MARSグループのメンバーであった二人の建築家からのもの、さらに展覧会の直接の批判としてではなく、展覧会後正式にグループを退会したリュベトキンが、展覧会の前年に発表したMARSグループへの批判を取り上げる。

最も早い反応は、当然のごとくイギリス国内からのものであり、大別すると肯定的なものと否定的なものになる。肯定的なものとは展覧会の開会の2週間後に出たAJ誌で、MARSグループのメンバーであるフライの解説を掲載し、詳細に展覧会を解説している³²⁾。また、AR誌では、2月号にコルビュジェの開会の祝辞をシャンドによる英訳で載せ、加えて展覧会の内容を詳細に解説している³³⁾。両誌ともその編集にMARSグループのメンバーが関わっていたために、近代建築の啓蒙というMARSグループの使命を意識してか、展覧会を広く一般に紹介しようとしていることが読みとれる。

イギリス国内の反響として興味深いのは、展覧会を否定的に扱っているもので、RIBAJ誌³⁴⁾とAAJ誌³⁵⁾に載った論評である。RIBAがMARSグループすなわちヨーロッパ大陸の近代建築に対して否定的なのは、1934年にRIBA創立100周年を記念して建てられたRIBA本部の建物のデザインが、新古典主義が加味されたモダニズムを基調としているのを見ればわかるように、30年代になっても保守的な位置を保っていたことによる。特に、1934年に『モダニズムズ』(Modernisms)という本を書いたレジナード・ブロムフィールド(Reginard Blomfield, 1856-1942)は、その言動が、イギリス建築界に影響力を及ぼすRIBAの会長という立場であったにもかかわらず、公然と近代建築をコスモポリタンの建築として嫌悪している³⁶⁾。

一方、AAは30年代ははじめから次第にボザール風の教育方針から、ユニット・システムというグループで設計を進めるという、近代的な設計指導が行われるようになっていた。しかし、展覧会が行われた1938年は学長(Chaireman)にグッドハート・レンデル(H.Goodhart-Rendel, 1887-1959)が就任しモダニズム路線が一時中断した年であった³⁷⁾。この時に展覧会に対する批評が、AAJ誌にユニット15の学生一同の名前で載り、反モダニズムの色が強いものとなった。ユニット15は、5年次生で卒業研究を行うユニットであり、

その中間報告的な意味でこの展覧会を取り上げたと推測される。

RIBAJ誌、AAJ誌の批評のポイントは、ほとんど同じで、新建築展が、ショウのはしがきにもかかわらず、一般大衆にとってわかりにくいものであり、また、なぜそのようなモダニスタイルが取り入れられたかという歴史的な考察が欠けており、自分らの自己満足に終わっているということであった。確かに近代建築のスタイルの歴史的な考察は、行われていないが、MARSグループは、様式変遷史に視点はなく、むしろ都市の歴史的な文脈調査を方法論として取り入れていることに関心があった。展覧会の一角を占めていた都市計画の部門は、他の個々の近代建築を紹介しているものに比べて扱いは少なかったのだが、これは、グループが都市計画に関心がないということを示すのではなく、概要的な扱いをしているためであると思われる³⁸⁾。

次に諸外国の反響を見てみる。最も早かったのが、展覧会の翌月のオランダのCIAMグループが出している機関誌、『De 8 en OP BOUW』であり、短い記事ではあるが紹介文を掲載している³⁹⁾。この情報は、オランダのCIAMグループの中心メンバーであった、コルネリス・ファン・エーステレン(Cornelis van Eesteren)によるところが大きく、彼は実際に展覧会を訪れ、その後開かれたMARSグループの展覧会委員会でその感想を話しており、展覧会のヨーロッパ巡回展を提案している⁴⁰⁾。

次にヨーロッパ諸国以外の反応を見る。新建築展が影響を受けたと思われる近代建築:国際展が開かれたアメリカの反応は比較的早い。1937年にイギリスの近代建築展を行うと同時にAREcord誌とAR誌が相互に編集の交換を行い、アメリカ、イギリスの特集号を組んでおり、同じ英語圏ということもあって、展覧会の2カ月後にAF誌AREcord誌において展覧会のこと紹介されている⁴¹⁾。しかし、これらも紹介の域を越えるものではなく、批評あるいは論評という内容ではなかった。

イギリス以外の国で、最も展覧会を詳細にかつ論評を加えて紹介した国は、日本であった。1938年4月、展覧会のわずか2カ月後に『建築世界』誌に、当時から諸外国の近代建築の状況を紹介していた小池新二によって、「MARS 展報告」という文章が掲載されている⁴²⁾。地理的な差異を考えると、この報告は、ほとんど同時に行われたといっても過言ではない。小池は、展覧会のカタログのショウによるはしがきと、AJ誌のフライの解説文の全訳を載せ、ショウの意図を読みとり、MARSグループを「火星団」と訳している。彼は、イギリスは元来保守的なところで、ヨーロッパの近代建築に関しては後進国であったのであるが、逆に展覧会に見られるように、いったん近代建築がイギリスに根付くようなことになれば、大いなる発展が期待できる⁴³⁾、と述べ、イギリスの近代建築の状況を正確にとらえている。

次に建築家個人の展覧会に対する反応及び論評を見てみる。最も早い反応は、前述したように、展覧会の翌月のAR誌に掲載された、ル・コルビュジェによる展覧会の開会式で行われた祝辞である。彼はMARSグループのイギリスの保守的風土のなかでの近代建築への取り組み方を、倫理的な態度だとして、次のように評価している。

「しかし、MARSグループによる展覧会が、このように成功した裏には何かほかの理由があるのではなからうか。イギリスにおける工業的先進性といふ意味での企業の商業性が結びつき、寛大な精神をもってグループを評価たらしめたのである。あらゆる段階で基金を

惜しまない、このような自由主義に根付いた企画は、他のところで見たことがない。これが、かくある古いイギリスの最大の秘密なのであろうか。イギリスは常に实际的でありながら、どのように新しいものを混ぜていくのかということを知っているのである。」⁴⁴⁾

展覧会において自分の作品が数多く展示されており、多分に外交辞令的な意味合いがあるのだろうが、イギリスの新しさと古さ、革新と伝統の混在をきわめて高く評価している。しかし、彼は、展覧会の祝賀レセプションの席で、イギリスに対する多少の皮肉を込めて次のようにもいう。

「もし近代建築がイギリスで成功するなら、それは世界中どこでも成功するにちがいない」⁴⁵⁾ (写真1)

LE CORBUSIER WELLS COATES J. M. RICHARDS SERGE CHERMAYEFF
(写真1) New Architecture 展オープニングセレモニー
[出典Architectural Forum p 10 1938 .3]

このコメントに見られるように、外から見たイギリスの建築状況とは、想像以上に保守的だという印象がこの展覧会まで存在していたことがわかる。

次にMARSグループの二人のメンバーと、リュベトキンによる批判を取り上げる。

ヘルマン・ツバイゲンタール(Hermann Zweigenthal, 不詳)と、オイゲン・カール・カウフマン(Eugen Karl Kaufmann, 1892-1984)による批判は、1938年7月に書簡報告というかたちで、MARSグループ執行部に提出された⁴⁶⁾。彼らの論点は、展覧会がその最大の目的であった、近代建築の一般大衆への啓蒙という点では成功裡に終わったと認めているものの、未だMARSグループ自体に明確な原理、指針が欠けており、そのため近代建築というテーマ、何をもって近代建築というのかという定義が曖昧であるという。MARSグループは単なる仲良しクラブあるいは理念的な集団ではなく、名前が示すように科学的方法論をもったリサーチ(研究調査)の集まりとすべきだと主張している⁴⁷⁾。

この批判は、リュベトキンが展覧会の1年前の1937年2月に、MoMAで行われたイギリスの近代建築展に併せて行った批判を想起させるものである。リュベトキンは次のように言っている。

「不幸にも、これらの目的を達成するような批判は、現在イギリスにはほとんど存在しない。これは、偶然ではなく、すべての建築雑誌が、建物を技術的な視点から見るとはしない、単なる中傷文によって大きく影響されているという事実と非常に関係している。現在、建築家は自らの存在意義を明らかにするために組織化せざるをえない状況となっている。そのような集まりの最初のものとして、MARSグループというのがある。そこには、この国における建築家

の先端をいく願いがこめられていた。不幸にもこのグループは、設立から3年の間でしだいにその活動力を落としてきた。この理由として明らかなことは、このグループ内で本当の意味での批判が欠如していたことにある。思考を明確にすることなしに問題に取り組み、またある一定の概念にとらわれている限り、このグループの建築家たちは、自らの近代建築の定義という困難に対して、決して打ち勝つことはできない。」⁴⁸⁾

このリュベトキンのMARSグループに対する批判的声明は、MARSグループの活動に限らず、イギリス近代建築運動の問題点、特に自己批判の必要性という点を鋭くとらえている。当時のイギリス近代建築の特徴として、単にそれらが、リュベトキンらを含めた外来からの刺激に動かされており、真にイギリスに根付いたものではなく、そうするためには、自らを問い直すことが必要であると、リュベトキンは主張している⁴⁹⁾。

リュベトキンのイギリス近代建築への洞察力を示すこととして、彼がMARSグループそしてイギリスにおける近代建築がもつ問題点を、すでに展覧会の前に指摘していたということがある。さらに重要なことは、これらの批判がイギリス人ではなく、外国人（リュベトキンはロシア人、カウフマンはドイツ人）によって行われたという事実である。つまりヨーロッパ大陸由来の合理主義思想を身につけた者ほど、イギリスにおける近代建築運動の特徴、あるいはヨーロッパにおける近代建築運動との差異を、肯定的にも否定的にも、いち早く認識できるという現象があることを示している⁵⁰⁾。なお、リュベトキンは、帰納主義あるいは経験主義に代表されるイギリス的思考の根底には、事象を演繹的に明確に定義するという、ヨーロッパ的合理主義の思考とは異なる認識が存在することを、十分に理解していた事実を付言しておく⁵¹⁾。

彼らがイギリスの特質として指摘したことを要約するなら、イギリスにおける近代建築運動自体の曖昧性といえる⁵²⁾。それは、MARSグループによる新建築展が、ル・コルビュジェを中心としたインターナショナル・スタイルの近代建築の啓蒙を意図し、事前にサマーソンらによって近代建築自体の定義を明確にしようとする動きがあったにもかかわらず、結果的には、その反対の流れである歴史主義的建築をも含むものとなったという矛盾に見られる。

6. まとめ

1938年のMARSグループによる新建築展の意味は、1930年代のイギリスの近代建築運動におけるMARSグループの活動のなかで、次の二点に結論づけることができる。

第一点として、MARSグループの1933年の結成から1930年代の活動と新建築展の経緯における事象を分析することで、グループの結成以来の問題として、何をもって近代建築とするのかという定義を問う是非が存在していることがわかった。そして新建築展の最大の目的が、都市の問題を踏まえたCIAMの主張する近代建築の啓蒙と紹介であり、内実この近代建築の定義に対して、グループ自身が答えを出すことにあった。

第二点として、国内外の新建築展に対する反響とその批判を分析することで、上記に述べた問いに対する以下三つの答えがあることが明らかとなった。① 展覧会におけるCIAMグループの建築家による展示数が示すように、イギリスの近代建築はその保守性ゆえ困難なものではあるが、ヨーロッパ大陸における近代建築をその指標と

すべきであるということ、②イギリス国内における展覧会の反響が示すように、ヨーロッパ大陸の近代建築とは異なる、イギリスの伝統に従う近代建築を模索すべきであるということ、③ヨーロッパ大陸からイギリスに移住した外国人からの反響が示すように、①、②の二つの流れに偏向するのではなく、自己批判を通して、近代建築に対するイギリス自らの定義を継続して行う必要性があるということ、の三つである。この③の批判的態度は、偏向を避けるがために曖昧なものとして映るが、近代建築の存在条件を問うという意味において、イギリスのものの考え方の根底にある、帰納性、経験主義性、そして自らを批判するという相対的思考と最も共振するものであり、①、②の答えを統合する方向性をもっていたといえる。

以上の二点をまとめると、MARSグループを近代建築史上に位置づけようとする視点から鑑みれば、新建築展は、以下の重要な論点を提供するものとみなせる。それは、新建築展において、イギリスにおいて伝統か革新かという二つの異なる近代建築運動の流れが現出していた。そして、イギリスの近代建築運動に関する既往研究においては、概して近代建築の伝統的解釈、つまり一方の流れを強調しているものが多くあるが、この新建築展には、二つの流れへの偏向を避ける動きがあり、特に展覧会以降のグループの活動に多大な影響を与える特質、二つの異なる流れの中での絶え間ない葛藤と、それに対する自己批判的態度を根付かせる一つの契機となった、ということである。

こうした特質に関しては、具体的な建築を通しての考察が必要と考えるが、これは、MARSグループがCIAMにおいて主要な役割を行い、個々のメンバーが建築設計活動を行うことになる戦後の近代建築運動において、次回以降に稿を改めて論じたい。

謝辞

この論稿をまとめるうえで、AAスクール大学院の研究論文指導教官であり、ケンブリッジ大学キングス・カレッジの研究員であるDr. Nick Bullock, AAスクール講師、Andrew Higgottは、個人指導における議論を通して多大な助言を得たこと、Dr. John R. GoldにはMARSグループの先行研究者として、また、口頭発表の際のクリティクとして貴重な意見を承ったこと、また日本大学理工学部建築学科建築史建築論研究室助手の大川三雄先生には、小池新二に関する貴重な資料を提供していただき、深く感謝致します。

注

- 1) MARSグループに関する既往研究は、A. Jackson *Politics of Architecture* Architectural Press, 1970 がイギリス近代建築運動を通史的にとらえ、その中でグループに関して言及している。また一次史料としても価値あるものとして J. Summerson, *Introduction Modern Architecture in Britain* by T. Dannatt, Batsford 1959 をあげることができる。MARSグループに焦点を当てた論文としては Malcolm Readin, Peter Coe, Lubetkin and Tecton, *Arts Council* 1981; Louise Campbell, *The MARS Group, 1933-39*, RIBA Transactions 8 1984/85; M. Reading, *A History of the MARS Group*, AAThesis 1986; R. Landau, *The End of CIAM and the Role of the British, Late CIAM*, RASSENKA 52, 1992; J. Allan, Berthold Lubetkin, chapter 8 Lubetkin and MARS Group, RIBA, 1992 があげられる。
- 2) J. R. Gold, *Commodity, Firmness and Delight: modernism The MARS Group's New Architecture exhibition (1938) and imagery of the urban future*, *Planning Perspectives* no. 8, pp. 357-376, 1993, *The experience of modernism, Modern architects and the future city 1928-1953*, E&FN SPON, London 1997 なおゴールド氏による研究は、元MARSグループのメンバーとのインタビューとイギリス、アメリカにあるMARSとCIAMを中心とした史料に基づいており、氏の専門である都市計画史的な視点から1928年から1953年までのイギリスの近代建築運動を考察している。だが実際にはMARSグループの終結は1957年であり、53年までとしているところに疑問が残る。

- 3) MARS グループに関する一次史料としては、RIBAには構道家オブ・アラップ、建築家ゴッドfrey・サミュエル、イエノー・ゴールドフィンガー、の3人のア・カイブが存在し、主にそれらに基づき研究を行った。
AAスクールには、過去AAに関わるメンバーによって収集された資料があり、特にグループ成立以前の書簡が存在する。
- 4) Modern Architectural Research AJ vol.77 1933.4.26 p550
- 5) CIAM第1回会議にイギリス代表の建築家はいないことは、ランダウによるイギリス近代建築の特質の考察を含めた指摘がある。R.Landau, The History of Modern Architecture that still needs to be written, AFiles21, 1991 参照。
- 6) MARS Archives AASchool Letter to H.Robertson from the General Secretary of the CIAM 6.7. 1929, Letter to the General Secretary of the CIAM from H.Robertson, 27.7.1929
- 7) M.Steiman, CIAM Documente 1928-1939, Birkhauser Verlag, 1979 p213
- 8) David Roebuck, Group Activity and the British modern movement 1920-1939, 1974 unpublished
- 9) 既往研究においてもしばしばMARSが何の省略かにおいて混乱が見られる。Modern Architectural Research Society としている例が一番多い。
- 10) Gold, ibid. p111 and Samuel Archives RIBA SaG/90, ただしこのCIAMの規約に関してはフランス語版とドイツ語版があり、MARS グループはフランス語版に従った。このフランスとドイツのCIAM内での近代建築に対する理念の相違は、戦後のCIAMの終焉まで続いており、MARS グループはその両文化の調停的役割を果たしている。このことは別稿にゆずる。
- 11) シェンドによる推薦がありながら正式のメンバーリストにエンバートンの名前は載っていない。
- 12) Samuel Archives SaG/90 RIBA, 1934年の12月にグループの規則制度委員会が会則の草稿を作成している。
- 13) Edit. by D.Sharp, Connel Ward Lucas, Modern Movement Architects in England.1929-1939; Book Art, 1994 p11 参照。
- 14) 具体的には、1938年前後から煉瓦を使い、ジョージアン・スタイルと近代建築の融合を意図した住宅の建設が多くなる。また1940年代のAR誌面上にはイギリスの伝統的美的概念であるピクチャレスクやイギリスの過去の建築、建築家の記事の特集が多数見られる。
- 15) Gold ibid chapter 4, Finding One Another, pp78-115, chapter 6, Projects and Plan, pp141-163参照。
- 16) CIAM 4会議の報告としては、W.Coates, MARS Circular Letter II, Report on 4th Congress for Modern Architecture, 29.8. 1933, Samuel Archives 90/2 RIBA
- 17) CIAM La Sarraz Declaration, III. Architecture and public opinion, Edit. U.Conrads, Programs and manifestoes on 20th century architecture, MIT, 1971 p111
- 18) Samuel Archives RIBA, SaG/90 Draft of MARS Group Programme, Dec. 5 1934
- 19) Samuel Paper RIBA, SaG/91 Central Exective Committee minute(以下 CEC)2. 1935
- 20) Samuel Archives RIBA, SaG/91 Intermediary Report of Exhibition Committee 11.4. 1935
- 21) Samuel Archives RIBA, SaG/91 ibid.
- 22) Samuel Archives RIBA, SaG/91 Draft Programme of Proposed MARS Exhibition Spring 1936
- 23) ゴールドによるとこの3条件にする案はサミュエルによるものというところだが、その確かなる記録はなく、デンビーとの話し合いで決まったと思われる。Saumel Paper RIBA, SaG/91 Exhibition of Modern Architecture (日付なし、1936年中につくられた) の中に初めてウォットンの引用がある。H.Wotton, The Elements of Architecture (1624), collected by Henry Wotton Knight from the best Authors and Examples, London 1911 また影響を与えたとと思われる出版物としてMARSの初期メンバーであった、グログによるMEN AND BUILDINGS,1931があり、その中でウォットンの理論が紹介されている。
- 24) 森田慶一訳注、ウィトルーウィウス建築書、東海大学出版、1979年、第一書、第四章、2. これらは、また、強さと用と美の理が保たれるようになるべきである....P15
- 25) Samuel Archives RIBA, SaG/91 MARS Exhibition of Modern Architecture Draft Leaflet 8.12.1936
- 26) H.R.Hitchcock, Modern Architecture in England, MoMA, NewYork, 1937
- 27) Samuel Archives RIBA, SaG/91 CEC minute, コルビュジェのスピーチはAR誌1938年2月号に掲載された。
- 28) Samuel Archives RIBA, SaG/91 CEC minute
- 29) Frederick Etchell trans. Towards a New Architecture, Dover, London 1927
- 30) Gold, Commoditie, Firmness.... ibid
- 31) 日本の建築世界を除き、ここにあげたものは、RIBA, AA図書館にある西洋の建築雑誌で、現在までにMARS 展覧会について記述があると判明している定期刊行雑誌である。現在確認中の資料として、チェコの建築雑誌STAVBAがあり、1938年のvolXIV, no4において、イギリス近代建築の特集を行っていることがわかっている。
- 32) MARS Group, Foreward to the Exhibition Catalogue, AJ. 1938.1.27 vol87 M.Fry, Review of the Exhibition, The MARS Exhibition New Burlington Gallery: until January 29
- 33) Le Corbusier, The MARS Exhibition of the elements of modern architecture, AR 1938.2. translated by P.M.Shand, pp109-110 The MARS Exhibition: A Pictorial Record pp109-116
- 34) The MARS Group Exhibition Some Considerations of Exhibition Technique, RIBAJ 1938.1.24, pp290-292
- 35) Students of Unit 15 AASchool, The MARS Exhibition, AAJ, no.53 1938 2 p386-388
- 36) Reginald Blomfield, Modernismus, London, 1934 またはR.A.Fellows, Sir Reginald Blomfield; An Edwardian Architect, A Ziemmer, London 1985
- 37) The Yellow Book, Focus no.3. spring 1939, Focus no4. summer 1939
- 38) 都市計画に関する展示は、グループ創設以来取り組んできたベスナルグリーン地区の不良住宅再計画の概要が展示された。これが、展覧会後に結成されたMARSグループ都市計画委員会が行うロンドン計画の基となっている。
- 39) NIEUWS UIT DE CIAM, Tentoonstelling der Mars Group te Londen, De 8 en OP BOUW, 1938.2
- 40) Samuel Archives RIBA, SaG/91 A.Korn brought Van Eesteren to the Meeting of the MARS Group 1938 1.18
- 41) Architectural Forum vol68 no3 1938.3 FORUM OF EVENTS, AND MARS PUTS ON A SHOW, pp10-12, A Record 1938.3 MARS propose "supple" building -with "mobility of marble dove" p76
- 42) 小池新二、MARS 展報告、建築世界、昭和13年4月号、再録、汎美計画、アトリエ社版、昭和18年6月、PP254-267
- 43) 前掲、小池新二
- 44) Corbusier ibid AR p109
- 45) Corbusier Events and Comments The Mars Exhibition Architecture and Building News 1938.1.p32
- 46) Samuel Archives RIBA, SaG/91 H. Zweigenthal and E.Kaufmann, Memorandum 1938 7.11
- 47) H.Zweigenthal and E.Kaufman ibid.
- 48) B.Lubetkin, Modern Architecture in England, American Architect and Architecture 1937.2 pp29-42
- 49) Lubetkin ibid.
- 50) 文芸評論家 柄谷行人は、イギリスとヨーロッパ大陸との間の思想伝搬に見られる、このような逆説性をいくつかの論文において指摘している。
柄谷行人、ヒューモアとしての唯物論、筑摩書房、1993 p104参照
- 51) Lubetkin ibid. J.Allan Lubetkin RIBA 1992 Chapter3 English Overture pp99-126 参照。
- 52) ランダウは、そのイギリスの曖昧性を暗黙の (implicit) と表現しており、イギリスの建築運動において明確な宣言文がないことと未だ成文化された法律がイギリスにないことの類似性を指摘している。Landau ibid.

(1998年4月6日原稿受理、1998年7月31日採用決定)